


911.368
I.26
5

911.368-126-5ㄅ

1200500756290



始



911.368
I.26
5



冬	三五
季節ある帝都	四
季節の窓	五
生命と風景	六
昭和十三年	七
春	八
夏	九
秋	一〇
冬	一一
天地凍む	一二
汎き國土	一三

昭和十四年	一四
春	一四
夏	一五
秋	一七〇
冬	一七
上高地と白骨	一八
高原盛夏	二三
長良と紀の海	二七
木 食 僧	二四
昭和十五年	二五
春	二五



年

水神をまつる日虧けて夏隣

つりそめで水草の香の蚊帳かな

かたつむり南風茱萸につよかりき

茶毘のあと炭いつまでも藜草

聖母マリアに灯し紫陽花こゝだ挿す

空梅雨に衷は旬ちみどりなる耶蘇詣て

御嶽昇仙峽

打水す娘に翠巒の雲ゆけり

毬栗のはぜかゝりゐる八重葎

秋雞が搏ちまろがせる狗いぬかな

秋雷に首さしのべて塙雞

夜も撞いて江湖の鐘や翳雲

註——江湖會

箱根賽の河原にて

曾我の子はこゝにねむりて翳雲

艇庫閉づ秋寒き陽は波がくれ

北巨摩古戰場耳塚原 二句

巖温くむら雨はじく秋日かな

雷遠く雲照る樺に葛咲けり

信濃白骨行

温泉ちかく霽れ間の樺に秋の蟬

花^{はな}金^や剛^つ纂^で焚^く火^くに燻^くべて魚^い香^かあり

マスクしてしろぎぬの喪の夫人かな

青森港

ペチカ燃え窓^{まど}の寒潮鷗とべり

うす日して震災堂の玉あられ

聖樹灯り水のごとくに月夜かな

昭和十二年

庭竈家山の雪に煙らしぬ

獮枕わりなき仲のおとろへず

粉黛の顔おほめきて玉の春

喫茶房支那樂かけて松の内

落飾の深窓にしてはつ日記

久遠寺

身延山雲翳く町の陸月かな

サーカスの身を賭る娘が春衣装

古墳發掘 二句

上古より日輪炎えて土の春

春佛石棺の朱に枕しぬ

花薊露珊瑚々と葉をのべぬ

死火山の夜をさむきまで二月空

樹々芽立つさなかの獵家午過ぎぬ

百千鳥酣にして榛の栗鼠

雲ふかき厚朴一と株の芽立ちかな

電やみて雲ゆく甌窠蘭咲けり

齒朶萌えて岩瀧翔ける雉子かな

雉子啼けり火山湖の春去ぬる雨

山廬庭前

葛の芽の風日にきざす地温かな

暮の春奥嶺の裸形たゞ藍し

赤の浦大嶽山

電まろぶ大山祇の春祭

山廬端午

軒菖蒲庭松花をそろへけり

楡がくり初夏の厨房朝焼けす

アカシヤに衷旬驅る初夏の港路

はしり出て藻を刈る雨に鳴く鶉かな

虹に啼き雲にうつろひ夏雲雀

椶の南風飛燕の十字かたむけり

朝日夙く麓家の桐花闌けぬ

はつ蟬に忌中の泉汲みにけり

縷のごとく女人のこゑや蚊ふすべす

軍雞乳み露の絮とびて夕映えぬ

ほとびては山草を這ふ梅雨の雲

梅雨風に楡がくれゆく戎克かな

反古焼却、ひそかに生靈もろくの供養をとて 二句

茂山に反古の煙たつ供養かな

奥嶺より郭公啼きて反古供養

山川は鳴り禽猛けく胡桃熟る

露の瀬にかゝりて螻蛄の流れけり

露さむや娘がほそ腰の力業

諸掘りの小童のせて片畚

落穂簸る身重の妻女齢老けぬ

野道ゆく秋の登音したがへり

零餘子おつ土の香日々にひそまりぬ

霧さぶくこずゑに禽はあらざりき

蔬菜園倭^{ちやま}雞^ま鳴く霧に日ざしけり

黍熟れて刈^刈敷^{しき}の萱穂にいでぬ

露の香にしんじつ赤き曼珠沙華

草川のそよりともせぬ曼珠沙華

初粟に山土の香もすこしほど

蓼^{えび}奠^{づる}のこゝだく踏まれ茶毘の徑

歸燕とび雲ゆく大嶺秋花滿つ

牧婦織り歸燕すゝろに鳴きにけり

甲府郊外朝氣

菩薩嶺は獄^{ごく}はるかにて歸燕ゆく

郡内吉田宿

天澄みて火祭畢へぬ秋つばめ

乳牛鳴き秋燕は迅く花卉越えぬ

卵とる人影かこつ秋の鶏

秋果つむ荷船の鶏もときあげぬ

雌は噎せて粟はみ立てる軍鶏の雄

軍鶏乳むみぎりの荏の香ながれけり

芙蓉咲き風邪ひく山羊の風情かな

秋の苑花卉日月をはるかにす

鑛山のひぐらし遠くなりけり

屍室の扉梧の蝸ひゞきけり



菟麻の實の眠るよりはつしぐれ

嶺を斜に日のどんよりと冬かすみ

八重山に遠嶺そびえて獵期來ぬ

雲を出て青鷹北に狩の場

大楳火煙らはて炎のあるきゐる

山雪に機織る箴のこだまかな

寒來り雲とゞこほる杣の幕

甕埴瓮冬かすみして掘られけり

霜枯れの荏を揺る風に耕せり

倦怠の眼に涙する
圍爐裡かな

爐火愉し柴もて鍋の芋さしぬ

爐話しばし茶うけに賤がふくみどゑ

雪眼の子ねだれる錢をねぶりけり

柚の子が喰ひふくらみて歳の暮

山地蕎麥掛け干す樹々に初しぐれ

瀧きほひ蘭の實枯れて時雨雲

しばらくは霰ふりやむ楡林

寒の内まくらのにほひほのかなる

峯の木に鶴とびはずむ雪嵐

淺草の寒晴るゝ夜の空あはれ

鼻さきに冬演劇の灯が噎ぶ

サーカスの娘が夜食撮る脂粉かな

肩蒲團ねむる容色おとろへぬ

河竹の身に韓紅の肩蒲團

積雪に古典を愛し煖爐焚く

冬薔薇土の香たかくなりけり

秋うつり寒去る阜の墳土かな

寒中や柴の蟲繭あさみどり

藪の樹に曉月しろみ木菟の冬

「穢土寂光」版成る

さむうして水洩すゝるひとりかな

落葉なき合歡の下霜とけやらぬ

山廬寒夜句三昧

寒を盈つ月金剛のみどりかな

師走八日、川上保宇長逝

初しぐれ保宇歸寂することのよし

季節ある帝都

千代田城げに太極の冬日かな

三越食堂

餓鬼むれて食曼陀羅にせみ関ぐ々

教會に隣接する某喫茶房 二句

茶房晝餐祈禱歌冬のこだませり

古風なる茶房の爐竈聖燭す

餓鬼盡きず夜を雅敍園のしぐれかな

短日の紙幣をつまむ天邪鬼

或るレストランにて 二句

レストラン淫翳爐火にひらめきぬ

無慚なる閨房

絹蒲團死は熟睡よりさめがたき

かにまたの輔弼めてたき朝賀かな

曲馬小屋極北の星見えわたる

十字街墓窖こゝに冬日影

北風吹く葬儀社の花白妙に

百貨舗の錦繡にまで北風吹く

掏摸も出て閉づ百貨舗に北風吹く

朝焼す震災跡の祈禱鐘

青山の落月にほふ瑩の冬

上野の秋

月濡れて美術の秋は椎がくり

秋の繪師ひもじからざる羽織着ぬ

美術院石階の秋月盈ちぬ

銀座街

玻璃透いて羅紗塵の護謨冬眠す

銀座裏雪降れる夜の鶴吊れり

青霧の葬花を濡らす銀座裏

厨帽と骨牌と卓に地階春

浅草風景

灯海に天は昏らみて歳の市

水洩や喜劇の灯影頬をそむる

浅草は地の金泥に寒夜かな

眼患者シネマの冬灯浴び行けり

寒日和シネマの深空見て飽かず

冬飢ゑて咒詛の食品はなやぎぬ

猪 啖 ぶ 夕 餐 の 餓 鬼 に 湯 氣 の 冬

青 服 の 娘 に 極 寒 の 昂^{たか}み ゆ

浅 草 や 朝 け に 彌 陀 の 龕 灯 る

公園風景

寫 眞 師 の 生^{なま}活^かひ そ か に 花 八 つ 手

季節の窓

田廬和樂圖

ひめむかふわうじに蚊帳の青がすみ

苑園花卉

聖鐘に休息やすらひの窓茄子咲けり

柳絮追ふ家畜に穹は夕焼けぬ

家畜倦み山風なごむ萑島

鐵扉透く樹々あざとろ黝あざとろく夏の花弁

蘭を愛で薄暑の葉巻くゆらする

草にねて山羊紙喰めり紅蜀葵

山梔子の花咲き閨の月羸せぬ

凶土哀曲

夜陰より癩者も出て雨祈る

田子の膳社日の徳利立ちにけり

早乙女の小鈴を鳴らす財布かな

耕耘に曇るつゆ草瑠璃褪せず

蠅とびて笹葬ひの枕經

麥秋の米櫃におく佛の燈

爬蟲らに嶽麓の花つゆむすぶ

水陸輪奐

船旅の灯に聖母像と濃紫陽花

水浴に綠光さしぬふくらはぎ

種痘針きめこまかなる娘をさしぬ

綾羅着て隠亡の娘が出かけけり

胡弓とる牧婦火に寄る梅雨入かな

近山に奥嶺は梅雨の月盈ちぬ

苒すふ燐寸の火おもき白蚊帳

大串に山女魚のしづくなほ滴るゝ

三日月に清宵の鷺巢ごもりぬ

山廬立夏

生命と風景

九月一日、醫家汀庵に滞在する長男急性盲腸炎との急使來る

倅惚如鬱々如たる秋日影

地に草に秋風の吹く影法師

國原の日輪顫ふ秋を駛す

タクシイに同乗、途すがら野本博士を訪ひ同車して急行す

博士の嚴診を経て即時入院、斷然腹部切開の大手術を決す

秋灯下觀念す吾子たゞひとり

驚破や醫が執刀す秋の灯の光り

氷山に子はひそむこの秋夜かも

秋の灯に見まじとす子の血がみゆる

手術後、第一病舎に退き絶對安靜の手當をうく

秋一夜掌を觸れもして玉額

秋の晝泣く母に子は眼をつぶる

翌、手術を知り急遽妻来る

吾子睡り病窓秋の光溢る

経過頗る良好

吾子に購ふ鉢鬼灯のゆれあへり

園の花弁幽らからぬ秋の日覆かな

郷さとがへり病舎通ひに露の秋

室内看護の間に於ける訪客

青柚活く錦繡の娘が薰衣香

内^{うち}窓^{まど}の紗^{すずめ}がくれに攝^{とら}るメロンかな

白樺^{びら}にかなく鳴^なきて大花壇^{おほはなだん}

十字架^{じゅうじ}祭^{まつり}看^み護^ご婦^{ひと}いてて秋花^{あきはな}剪^きる

落^{おち}月に媾^{あは}曳^ひの影^{かげ}さす花壇^{はなだん}

病^{びやう}閑^{かん}一^{いつ}宵^よ、娛^ご樂^{らく}室^{しつ}に青^{あお}年^{ねん}宰^{さい}相^{さう}の放^{はう}送^{そう}を聽^きく

快^{かい}調^{てう}の近^{ちか}衛^ゑの君^{きみ}に壁^{かべ}爐^ろ冷^{ひや}ゆ

絶^{ぜつ}食^{じき}後^ごはじめて攝^{とら}食^{じき}

匙^しをめで重^{おも}湯^ゆ甘^{あま}ましと今朝^{けさ}の秋^{あき}

起牀する窓の秋草繚亂す

女醫優に吾子のしゆびんを翳す秋

花卉の晝海老フライ喰ぶ子を讃ふ

全く快癒退院

あらがねの土踏む草履秋涼し

廬をさせば野山の錦さしそめぬ



昭和十三年

初機のやまびこしるき奥嶺かな

深山川連理の鳥に年立ちぬ

春還る山川機婦に奏でけり

春浅き灯を神農にたてまつる

初竈みづほの飯は白かりき

ねこやなぎ草籠にして畔火ふむ

富士川波木井のほとり

富士渡しし姉妹の尼に浅き春

鯉澤古宿

春浅くやくさを泊むるはたごかな

國原の水たてよこに彼岸鐘

絨毯に手籠の猫子はなたれぬ

壁爐冷え猫子あくまで白妙に

花祭りみづ山の塔聳えたり

彼岸會の故山遠とほまるところかな

噉くにぬれて陸橋の梅咲き満ちぬ

梅ちりて蘭青みたる山路かな

宿入の身をなよくと會釋かな

花菜蔭蝶こぼれては地に跳ねぬ

夜嵐のしづまる雲に飛燕見ゆ

歸省子の擁すギターに宿雪盡く

ころしも三月みそか

興津園藝試作場

暮春の娘柑樹の珠に戯れぬ

春の雷まひ白る晝るの山を遠うせり

風吹いて蝶柚山を迅くすぎぬ

註——柚山は木を伐り出す山の稱

山墓の濡るむら雨にし榎こ子み咲く

大徳坊句筵

松蟬に神山雲を遠ざけぬ

別れ霜温室花月の光りさす

春驟雨迅く蕊しるき野茨かな

龍舌蘭夜は閑春の星下る

山櫻嶺々の青草香をはなつ

風雨風ぐ大巖山の名残り花

四月十七日、粕谷の蘆花舊居を訪ふ

蘆花舊廬灰しろたへに春火桶

山廬庭前

巖 温く 芽 牡丹 たわむ 雨の 絲

某君經營の温室に遊ぶ

土 蒸して メロン 花 咲く 小晝 時

六峰氏より贈られたる觀世音を祀らんとするに折柄
山上曹源師來庵、開眼供養せらる

白 木 瓜 に 翳 料 峭 と 推 古 佛

瀧 おもて 雲 おし 移る 立夏 かな

田 水 満ち 日出づる 露に 蛇 莓

胡 桃 生る 瀧 川よ ども 鮓と びぬ

アカシヤの耕馬にちりて薄暑かな

天目山勝頼夫人墳墓

山墓に薄暑の花の鬱金かな

キヤベツ採る娘が帯の手の臘脂色

蒟蒻ニンジの咲く薬園ニギのき、つね雨

枝蛙風にも鳴きて茱萸の花

水喧嘩墨雲月をながしけり

蛞蝓の流^{なが}し^めしてはあゆみけり

緑金の蟲芍薬のたゞなかに

桑の實に顔染む女童にくからず

芋の花月夜を咲きて無盡講

嶽腹を雲移りゐる清水かな

焼^や肉^{にく}にうすみどりなるパセリかな

吹き降りに瀬をながれ去る女郎蜘蛛

蟬鳴いて夜を氾濫の水殖えぬ

つばめ野には下りず咲き伸す立葵

しげくして雲たちこむる梅雨の音

降りつぎて花卉にいと澄む梅雨湛ふ

梅雨霽れの風氣短かに罌粟泣きぬ

さつこんは愛兄と呼びて更衣

旭影來し茄子馬にまた夕影す

月光のしたゝりかゝる鶺鴒かな

篝火に雨はしる鶺鴒の出そろへり

泊つる夜は鶺鴒舟のみよし影澄みぬ

鶺鴒のおとろへて曳くけむりかな

畫廊出て夾竹桃に磁榻濡る

櫻欄咲いて夕雲星をはるかにす

横濱高臺の舍弟が新居を訪ねて

明け易き波間に船の假泊かな

無花果熟れ白鷺卵を地に産みぬ

無花果にゐて蛇の舌見えがたし

樹の栗鼠に蔓の鴉は通草啄む

書に溺れ秋病むこゝろ
驕りけり

山童やまのこに秋の風吹く
萱の蟲

遊龜公園

水の鶯に秋逝く月のなじみけり

蘆の花水光虹を幽かにす

秋寒や瑠璃褪せがたき高嶺草

K-氏祖母の葬儀に會して

駕の僧嚏はなびり露の簾を垂れぬ

地蜂焼く秋の峻土温くもりぬ

草童のちんぼこ螯せる秋の蜂

あな凄の秋蜂燃ゆる火を螯せり

秋の蜂巢を焼く土にころげけり

えんやさと唐鋏かつぐ地蜂捕

白猫の見れども高き歸燕かな

秋燕に日々高嶺雲うすれけり

蟬捕つて瞳の炫耀をみれば秋

秋暑く曇る玉蜀黍毛を垂れぬ

蟬とりし蜘蛛をかすめて秋の蜂

時化すぎて高萩しるく花つけぬ

鬼灯に岸草の刃もやゝ焦げぬ

花温室二時日輪は虧けはじめけり

今日もはく娑婆苦の足袋の白かりき

すゝり泣く艷容足袋を白うしぬ

寒うして賣僧のしたる懷ろ手

冬かすみして誕生の窓の燭

萬年青の實蝸廬の年浪流れけり

こゝろもち寒卵とておもかりき

寒卵くわん 嚙み世故を囁けり

遊龜公園

一蓮寺水べの神樂小夜更けぬ

煖爐燃え蘇鐵の青き卓に倦む

寒ゆるむ螺階は蠱まじの光り盈つ

末弟結婚式後、S園に晩餐を共にす

着粧ふ座邊の電気爐あつすぎぬ

うす霨ひの日に温ぬ室ろの娘は働はたらけり

身延山

冬山に數珠賣る尼が栖すまかな

二子塚所見

斃馬剥はぐ大火煙けらず焚たかれけり

冬耕の婦がくづほれて抱く兒かな

嶺々そびえ瀬音しづみて冬田打

新墾にん野照る日あまねく冬耕ふす

月いでて冬耕の火をかすかにす

放牧の冬木に胡弓ひく童あり

久しく病牀にありし白石實三、十二月二日午後二時五十分
遂に永劫不歸の客となる

臘月の大地おほよそ寒むかりき

うそぶきて思春の乙女毛絲編む

雲間出る編隊機あはれ寒日和

凍花愛づ暖房の窓機影ゆく

白晝の湯を出て寒の臙脂甘し

曳きいでし貧馬の鬣かみに雪かゝる

冬鵬のゆるやかに尾をふれるのみ

馬柵の霜火山湖蒼くなりけり

鷗とび磯の茶漁婦に咲きいでぬ

K—院境内に存する嵐外の書「山路きて何やらゆかし
すみれ草、はせを」の句碑いと碑蒸したり

茶の木咲きいしぶみ古ぶ寒露かな

寒の雉とさかゆらりともの思ふ

金剛纂^で咲き女醫に冷めたき心あり

苺熟る葉の焦げがちに冬かすみ

波奏^かで神護^{まも}りもす冬いちご

いちご熟れ瑠璃空日々に深き冬

あるときは雨蕭々と冬いちご

雲
通
る
冬
ほ
そ
瀧
の
こ
だ
ま
か
な

花
温
室
の
新
月
昏
ら
み
年
う
つ
る

天
地
凍
む

冬
い
ち
ご
摘
み
黄^わ牛^{うし}
を
曳
く
娘
か
な

め
ざ
し
行
く
大
刑
務
所
の
雪
晴
れ
ぬ

電
氣
爐
の
翳
惱
ま
し
く
う
つ
ろ
へ
り

大熊座地は丑満の寒さかな

強霜に峽川ひろく湛へけり

灯をかゝげ寒機月になほ織りぬ

八つ手凍て寝起きの魔風幽らかりき

冬の墓川にはなてば泳ぎけり

山の童の木菟捕らへたる鬨あげぬ

石路の凍て巖の鳴禽尿をとゞむ

去年今年間になづる深山川

枯山に奥嶺^{おくの}は藍^{あゐ}く鳶^{とび}浮けり

冬薔薇の咲きたはむるゝ一と枝かな

日たかくて鷺とぶ蓮田氷りけり

土凍てて日を経る牛蒡朽葉かな

空寒く土音のして牛蒡掘る

寒風呂を出てなりはひの檻樓を着ぬ

子地獄の吹きさらさらるゝ冬至風呂

櫛ひろふ手を水寒くこぼれけり

汲み溢る寒水の杓よるべなし

雪に鳴く雌の老雞を見かけけり

冬一時黝き蘇鐵に日すわりぬ

甲斐絹の産地郡内

雪解富士戸々の賤機こだませり

汎き國土

温故的靜物

收穫すキヤベツ白磁に蔬菜籠

枇杷大葉籠の實蔽ふうらおもて

六峯氏が贈れる推古佛の前に

松の葉と春松露もる釉陶器

北邊の白夜

夏至白夜濤たちじらむ漁港かな

白夜の帆世紀をへだつ魚油炎ゆる

ハープ弾く漁港の船の夏至白衣

この白夜馴鹿トナカイの乳にねる兒かな

氷下魚釣獸けだものの香をはなちけり

春めく日林相雲を往かしむる

春きたる氷河の樹かげ狐舎に沁む

養狐交^たけ春の氷海鏡なす

氷海の朝焼けきびし狐舎の春

海猫群れ昆布生成の潮温るむ

シヤンツエに冬眩耀の翳^た経ちぬ

處女雪にシヤンツエ小夜の帷垂る

降誕祭シヤンツエ蒼き夜を刷けり

シヤンツエに遅き寒月上りけり

草童のゐる界限

天をとび樋の水をゆく蒲の絮

洎^ッ夫^ラ藍^ンは咲き山墓地霑へり

春蘭の山ふかき香に葉をゆれり

岩瀧の齒朶萌えあふれ雉子乳るむ

孵す雉子穂芽つむ童と見交はしぬ

蘭咲いて貌くれなるに雉子孵す

雨濇く蛇に卷かるゝ雉子かな

伐株にとゞまる蛇の尾を垂りぬ

草童に蛇の舌影かげろへり

蛇の血の水にしたゝり沈みけり

老雞の墓ぶらさげて歩るくかな

山川に剥ぎたる墓を手離せり

人寰抄

眼がみえぬ人の夜を澄む寒さかな

茶碗さむくいさよほ忿る齒の觸れにけり

寒明けし童は青漢に飢ゑしらず

彼岸會の翠微亂山そばだちぬ

彼岸婆々阿難あなんの嶮あやを越えゆけり

註——阿難峠は嶽麓精進と古關とをむすぶ

チャルメラに微温遍照草萌ゆる

チャルメラに雪解の軍鶏は首かしぐ

チャルメラに鈴掛珠を揺りあへり

整へる爆音

編隊機冬の大八洲を下にせり

編隊機ゆき冬空は忘れがほ

編隊機寒の鋼空なゝめなす

編隊機冬日の國土擧げ移る

寒霽れの編隊機あはれ大嶺越ゆ

寒日和必定編隊機墜ちず

しのゝめに犇めく春の編隊機

昭和三十三年

春
空の乳雲にとぶ編隊機

編隊機
涌き神苑は花卉の春

編隊機
春の靴音をともなはす

昭和十四年

飾り白みづの青藁ほのかにも

初年のたちかへる音に荒瀬かな

舊正の羅紗鋪の玻璃に護謨映ゆる

山川を流るゝ鴛鴦に松過ぎぬ

初年の神々鎮む嶽雪を見ず

弓初め大山おほやま祇つみは雲かゝる

楪をとる妻に園はうす雪す

鏡中に剃り顎青き初湯かな

温室灯りみて古年の闇深き

伊達の娘は韓紅の春袋もちにけり

漁樵絶えげに初霞む野山かな

山廬節分

こだまする後山の雪に豆を撒く

噉あまねく樹林新たに年たちぬ

ウクレレに春の燭おく古風の爐

ウクレレ春搖籃の兒の瞳はみどり

春を穢れ聖女いよく着装へり

歎^ナ歎^ナくこゑ^ナ閨中に大椿樹

春祭高嶺の雪に笙鼓鳴る

大嶽祇初午の灯は雲の中

葱植うる夕影の土やゝ冷えぬ

菜は莢さやに蝶をとゞむる名残り花

桑萌えて地に雨霽れの風なごむ

野茨咲き氣弱き耕馬尾をふれり

春蕎麥の莖眞つ青に花盛り

峻梅に雪水ながれ花競ふ

幽谷蘆川の村鑛等各ミ炭俵を背負うて峠を越ゆるに或時迫ればところをきらはず

女神らの穢に草青む暮春かな

春ふかく泪せぬ眼の光りけり

結婚十數日にして花婿頓死したるK一家の花嫁に逢ふ

風鈴の夜陰に鳴りて半夏かな

はたと合ふ眼の惱みある白日傘

あながちに肌ゆるびなきうすごろも

寝る婦の白眼にしてうすごろも

更衣爬蟲のいろに蜂すだも腰こし

更衣地球儀青き夜を愛づる

陽炎のゆれうつりつゝ、麥熟れぬ

墓濡れて桐咲くほどの地温あり

某家に老病者を訪ふ

白蚊帳に亡くなるといふ身をしづむ

夏ふかく樹々愁ふ翳あるごとし

大阪木野町さくら花壇

撒水す娘に夕影は情あり

花桐に機影を惜しみ蹴鞠す

水馬はね風ふく浮葉ひるがへる

山廬庭前

梅桃とる童に山鵲は搖曳す

註——山鵲は三光鳥なり

草茂り藜の古色暎に濡れぬ

樹々黝くろみ日照雨に桃果もも爛熟す

桃果あり卓白晝の翳かげ淡く

脣くちびるふれて肉ゆたかなる桃果ももかな

桃果とる籠さはやかな噉くはに濡れぬ

うす虹に映えて桃熟る聖地かな

法體ほつたいのすきものめきて桃果もも啖くはぶ

虹映えて税關の隠夏立ちぬ

波のたり大繫索に夏日灼く

宙に浮くかもめに船は夏來たり

白晝灯る船・豪華なる驟雨かな

繫船に星ちりばめて初夏の闇

街頭瞥見

インディアン脣くれなるに夜涼かな

晴る、日も嶽鬱々と厚朴咲けり

天體の幽らみをめでて夏帽子

芭蕉に「深川夜遊」と前書する唐辛子の名句あり

大夏の青果を籠に夜遊かな

夕虹に蜘蛛の曲げたる青すゝき

大阪のK一氏より贈られたる燈籠を前栽の
苔蒸したる巖に据ゑて

葉がくりりに陶の燈籠梅雨入り時

嶽麓河口湖

水すまし交るみたかぶる富士嵐

蔬菜園土冷めたくて蚯蚓いづ

註——禮記月令に曰、孟夏の月蚯蚓出づ

撈ぐ蕃茄ぬくみて四方に雲群れぬ

菜園の暑氣鬱として踏まれけり

隱棲の蟬絶えまなき雨月かな

會釋して炎天の女童ふとあはれ

岐阜市より贈られたる提灯を夜々書窓に吊る

たまきはるいのちにともるすゞみかな

岐阜長良

梅雨のまのひととき映ゆる金華山

翠巒に何花かをる薄暑かな

瀧霧にほたる火沁みてながれけり

螢火を愉しむ童女顔寄せぬ

大阪木野町さくら花壇 二句

浪花女の夏風邪ひいて座に耐へぬ

夏衿をくつろぐるとき守宮鳴く

紀州元の脇海岸

礁貝の潮がくり咲く薄暑かな

饗宴の夕二句

なりふりにかまけて遅る葭戸かな

夏の灯に蠱まのくちびる臙脂濃し

御坊町N―旅館

夏館老尼も泊りながし吹く

素裸に寝溺れにける白蚊帳

山廬立秋

雲移りこずゑの蜻蛉とぶにたふ

桐の葉に蟲鳴き月の光^か顫ふ

蔬菜園

とぶなべに影仄かなる瓜の蟲

蟲ひとつ鳴きおとろふるこゑちぎれ

圃土を這ふ蟲かげもなくなりぬ

地をふみて秋を侘びしき鶉匠かな

珊々と草露下駄に蹴られけり

秋蟬に午後はわびしき雲明り

山居即事

秋の蟬夜も鳴く月のさしそめぬ

奥山の寒蟬月に鳴きにけり

嶺の焼木鷹みて四方の錦かな

嶽麓山中湖

山中の帆に高西風のつばくらめ

暮参して瞳の鮮あはらしき童女かな

無花果熟れ地にきよらなる草生ふる

いざよひの紺地金泥雲の間に

棗洗ふ清泉草に溢れけり

草魚釣るほそ絲たるむ秋暑かな

秋暑く串の生ま魚しづく燃ゆ

草の穂を豕は舐め雞は食む秋暑

鴟日和屠場の花卉は咲き溢る

蕎麥咲きて機影あしたの雲に見ゆ

高翔けす樹海の蝶に秋の虹

傷兵歸還二句

歸還兵のせし老馬に四方の秋

日は蕭と傷兵還り山河澄む

藪の端に大年移る月錆びぬ

燈して祝典の姫 嚏^{はちひ}りぬ

遊龜公園

白鷺泛き八方の樹々冬かすむ

噉あまねし温室を出て寄る藁焚火

寒禽に寄生木の雲ゆきたえぬ

瀧川の冬水迅くながれけり

湯ざめして卓の寶玉ひたに愛づ

窓掛に苑の凍光果くわをたもつ

絨毯の登音吸うて冬日影

ふところに暮冬の鍵かぎのぬくもりぬ

冬もみぢ端山の草木禽啼かず

凍て強しなが蔓に揺る山鴉

たちばなに冬鶯の影よどむ晝

神農祭^{きん}聖^{せい}らなる燈をかきたてぬ

凍光に放心の刻^{とき}ペチカ燃ゆ

祝祭の嶺々厳しくて寒の入り

足袋白くすこしも媚態あらざりき

在家法要

燭もえて僧短日の餉に興ず

壁爐燃えこゝろ淫らなるにも非ず

絨毯にフラスコ轉び寒の内

我執偏狭

容顔をゆがめて見入る冬鏡

日輪に薔薇はかなくて氷面鏡

樹氷群れ蒼天星によみがへる

枝槎枿と寒禽の透く雲凝りぬ

その中に寒禽顛ふ影のあり

鷹舞うて神座じんざの高嶺しぐれそむ

註——神座山はわが郷東南の天に聳ゆ

溪澄みて後山間近く時雨れけり

動物園にて二句

榆時雨れ金鷄きんけいは地をあゆむのみ

山椒魚うごかず澄める夕しぐれ

煙絶えて香爐の冷むる霜夜かな

上高地と白骨

上高地篇

日は渺と奥嶺秋園人をみず

鬱々とまた爽やかに嶽の白晝

山梨熟れ穂高雪溪眉の上

旅人にしぐれて藍き嶽鎧ふ

霧さぶく公園ホテル縦の中

霧の叡や穂高のもとを衷はし旬や發てり

燒嶽を詠む

秋風や聳えて燻いよる嶽の尖き

雲間燃え笹一色に秋の嶽

燒嶽や晴れて陽に向きがたし秋の空

噴煙に月出て旅も神無月

夜は夜の白雲ひ翳ひきて秋の嶽